

カーテンの隙間から朝の光が差し込んで、まぶたの裏にじんわりと白さが広がっていく。スマホのアラームが、のどかな音で鳴り始めた。

(……土曜日なのに、セットしちゃった……)

画面をぽんと叩いて、そのまま布団を顎まで引き上げた。今日は動かない。一日このままにいる。そう決めたとき、ガチャ、と玄関の鍵が回る音がした。瞬間、心拍が変わった。

(……千晃)

それだけでわかった。この音の聞こえ方を、僕はもう何年も知っている。

幼馴染の、千晃。中学のときから合鍵を持っている。

まだ今よりカントボーイが珍しかった頃、、僕は家を訪れた配達員の人に悪戯されそうになったことがある。それを助けてくれたのが千晃だった。それ

以来、彼は僕の家合鍵を持っている。

廊下を歩く足音が、ゆっくりと近づいてくる。それだけで、胸がじわっと温かくなる。それが嫌だった。

(顔、合わせたくないなぁ……)

最初に告白されたのは、高校二年の秋だった。千晃はいつもと同じ顔で、ただ静かに言った。

「守のことが好きだ。付き合ってほしい」

心臓が止まるかと思った。千晃はなんでもできる。かっこよくて、落ち着いてて、頼りになって、誰からも好かれる。クラスの中で、困っている人がいれば自然に手を貸す。そういう人間だ。僕は、そういう人間じゃない。

「……ごめん。僕じゃ、釣り合わないから」

「釣り合わない、って、どういう意味」

「千晃はなんでもできるし、僕は……カントボーイだし、色々、中途半端だから」

普通じゃないカントボーイの僕は、千晃の隣にいるべきじゃない。千晃の足を引っ張る。

「カントボーイかどうかは関係ないよ」

「でも」

「関係ない。俺は守が好きなんだ」

それから何度断っても、千晃は諦めなかった。変わらない距離で、変わらない顔で、ずっとそこにいた。千晃が諦めてくれたら、楽になる。

でも、本当は、諦めてほしくなかった。

(顔を見たら、また全部崩れる気がする)

咄嗟に、目を閉じた。布団を頭まで引き上げて、息を殺す。一分待って僕が起きなければ、帰るかもしれない。そう思いながら、じっとしていた。

部屋のドアが、静かに開いた。

(早く帰ってよ……)

足音が止まった。しばらく、動かなかった。

「守、まだ寝てるの？」

(そう。僕は寝てるんだ。だから帰ってよ、千晃……！)

「……そっか。まだ寝てるんだね？ じゃあ、」

少しの間があって、千晃がまた言った。

「俺が守のことを起こせたら、付き合ってね♡」

(え……っ)

布団がすうっとめくれた。外気が一気に流れ込んできて、全身がこわばった。太ももに、大きな手が乗った。体が、ほんの少し動いてしまった。

(何を……っ、何する気……っ)

手がゆっくり動き出す。膝の内側から、じわりと上へ。一センチずつ、確かめるみたいに這い上がってくる。

「んっ……う」

声が漏れた。

(だめだめ、声出したら……。起きてるってバレる……！)

でも付け根のぎりぎりまで辿り着いた指先が、パジャマの上からそこに触れた。迷いなく、まっすぐに。

「ひっ……っ♡」

(どこ触って……っ！♡)

すすす♡ と、割れ目に沿ってゆっくり撫でてくる。

「あ……っ♡ ん……っ♡」

(声が……っ♡)

「あ……っ♡ ん……っ♡♡」

すりすり♡ と割れ目をなぞるように、ズボンの上からゆっくりと往復してくる。

すりすり♡ すりすり♡ すりすり♡

(やだ、そこ……っ♡ おまんこ触ってる……っ♡♡)

「あ……っ♡ んん……っ♡♡」

ふにふに♡ ふにふに♡ と柔らかく押し込みながら、下から上へ。上から下へ。リズムを崩さないまま、淡々と続ける。

「守、ちょっと濡れてきたね？♡」

くちゅ♡ と、かすかな音が聞こえた。下着がじわじわと湿って、肌に張り付いてくるのがわかる。

「ああ……っ♡ ん……っ♡♡」

くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅ♡ と、じわじわと濡れていく。それでも千晃の手は止まらない。濡れた下着の上から、丁寧に割れ目を押し込みながら動き続ける。

「ああ……っ♡♡ ん、 あ……っ♡♡」

「まだ守は寝てるもんね♡」

（千晃の手を、止めなきゃ♡ でも寝てることに、なってるし……っ♡）

僕は声を堪えて、布団をきつく握りしめることしかできない。

「びちょびちょだよ、もう♡」

膝が内側に寄ろうとした。軽く押し広げられた。

「う……っ♡ あ……ん……っ♡」

耳元に近づく気配がして、低い声がすぐそこで言った。千晃の指先が、ぷっくりと膨らんだクリトリスを捉えた。

「ひっ……！♡」

「もう勃ってるな♡」

くりくり♡と転がすように撫でられる。快感を逃さない動きで、神経に直接触れてくるみたいだった。

「ああ……っ♡ んんっ♡♡」

（やだ……っ♡ クリはだめ……っ♡♡）

腰が勝手に動いた。逃げたいのか追いかけているのか、もう自分でも判断がつかない。